他者経験の構造と発生: フッサール『デカルト的省察』を読み直す

浜渦, 辰二

https://doi.org/10.15017/1397837

出版情報:哲学論文集. 23, pp. 23-42, 1987-09-20. 九州大学哲学会

バージョン: 権利関係:

## 他者経験の構造と発生

――フッサール『デカルト的省察』を読み直す――

浜渦

辰

はじめに

りまえのこととして、我々の行為の基盤となっている。ところが、それでは我々は他者を如何にして経験しているのかを語 我々は日常の生活において絶えず他者と関わっている。そこでは、我々が他者を経験しているということは、 極めてあた

ろうとすれば、我々は困惑に陥ってしまう。それは、伝統的な「他我認識」の理論の行き詰まりによってつとに示されて来 何にして生じるか、という問いとはさしあたり異なる、と言わねばなるまい。フッサールが『デカルト的省察』や『間主観 れているということが注意されねばならないだろう。例えば、他者経験とはそもそも何であるか、という問いは、それが如 た所であり、これに対してはまた、多くの批判や解決が試みられて来た。しかし、その際、他者経験は様々な仕方で論じら

性の現象学へ】等において展開した他者経験論も、伝統的な議論の延長上に展開されていると言ってよいが、ここでも、

が他者経験を問題にするのはどのような仕方においてであるのかが、まず明らかにされねばならないだろう。

に混同されてはならない二つのことであろう。このような**〈構**造(Struktur)への問い〉と〈発生(Genesis)への問い〉の 異なるものである。およそ、或ることの〈構造〉を問うことと、その〈発生〉を問うことは、 他者経験 (Fremderfahrung) を語るが、彼がそれによって語ろうとしているのは、言わば、他者経験の 《構造》 であり、そ 我に固有な(eigen)領野における経験と、それに基づけられつつ、それを踏み越える異他な(fremd)ものの経験としての フッサール自身が『デカルト的省察』で他者経験を論ずるにあたって、まず最初に述べていることである。なるほど彼は、 彼の様々な試みを伝統的な図式のなかに押し込めてしまった上で、その戯画化されてしまった理論に批判が向けられている り、それゆえ問題はむしろ、そこから如何にして我と他者という区別が出て来るのか、というように立て直されねばならな それが、伝統的な理論を袋小路に導いた元凶である。初めに与えられているのは我ではなく、我と他者が無差別の体験であ ように、筆者には思われる。「我の内在から他者の超越に至る道を求める」という思考にはどこかおかしな所があることは、 れは伝統的な「他我認識」の問いと一緒にされてはならないと共に、それに対する先のような批判ともまた、問いの性質が い――と。しかし、この批判が、適宜変更を加えてであれ、フッサールの他者経験論にも向けられるならば、それはどうも ところで、伝統的な「他我認識」論に対しては、次のような批判が様々なヴァリエーションにおいて繰り返されて来た。 −如何にして我の《内在》を越えて他者という《超越》に至るのか、という問いの立て方そのものが誤っており、 密接に交錯しながらも、安易

# 一 他者によって媒介された自己経験

関係を中心に、フッサールの他者経験論を検討することが、ここでの課題である。

我々は人間として共同性のうちに生まれ出て、他者との交わりのなかで自己を形成し、この関係性のうちで生き、そして

まさに問題となるのであって、

観などというものは、「共同精神」とも呼ぶべき共同体的な生からの抽象によってのみ得られるのである。ここにおいては、 で前社会的にあり、それから、他者との関係に入ることによって社会的な生となる、というような訳ではなく、孤立した主 ら共同体的生である」(XV. 420)、「私は初めから他者と共に生きている」(XV. 527)。つまり、私の生は、まず、それだけ 孤立してではなく、社会性のなかで生きている」(XIV. 401)。更にもっと強く、彼はこうも言っている。「私の生は、 我々の生はすべて或る共同性の烙印を押されたものである。こうしたことは、フッサールにとってもまったく自明のことで またそのうちで死ぬ。 自己を経験することは、他者を経験することと相関的にのみ生じることができる。それ故、フッサールはこう述べる。 からの区別において、各自は、自己を初めて同定する」(XIII. 244)、或いは、「我は、汝との対比において初めて構成される」 彼のテキストを見てみよう。「あらゆる人間の生は、交流的(kommunikativ)な生である」(VIII. 394)、「人間は、 その際、 他者と絶えず交際しながら生活していようと、 隠遁生活のなかで孤独に生活していようと、

(XIII. 247)′ い

べている。しかし、それが何を意味するかは注意深く理解されねばならない。還元によって世界と他者は失われるのではな られ、単なる現象と化し、「独特の哲学的孤独」(VI.187) がもたらされるのではないか、と。確かに、フッサールはそう述 して交流的であるとしても、 人格的態度と人格的な生世界 (Lebenswelt) の記述であって、自然的及び人格的態度が「実践的な生の態度」 (XIII. 449) と しかし、以上に対しては容易に疑問が生じる。こうした記述はすべてフッサールの言う自然的態度と自然的世界、 彼が書斎で孤独に哲学を開始し、 現象学的還元を遂行すれば、世界と他者のすべては括孤に括 は

い (vgl. XIII. 149)、ということを確認しておく必要があろう。

特に他者経験という問題との関係においては、現象学的還元が所謂「内的知覚の明証」説と結びつけて理解されてはならな

指標」・「手引き」となるという、フッサール自身がしばしば注意していたことをここで繰り返す必要はあるまい。

自然的態度において世界と他者が如何に与えられているのかが現象学的な分析のための

我に関わる知覚のすべてが明証とは限らない」と述べ、「内的知覚と外的知覚は、これが自然的に理解されている限り、まっ 誰もが自己知覚において知覚していると思っているものを理解するなら、我についての知覚のすべて、或る心的状態という 証」説から出発した伝統的な「他我認識」論の陥った袋小路が、待ち構えているかのように見える。しかし、『論理学研究Ⅱ II/2 23lf.)。この「内的知覚の明証」説批判は、フッサールのその後の展開においても絶えず繰り返されるところである。 たく等しい認識論的性格を持つもの」であり、ブレンターノ流の「内的知覚の明証」説は維持しがたい旨を述べていた(LU の2』の付論「内的知覚と外的知覚について」においても既にフッサールは、「もし、我ということで誰もが理解すること、 にはただ間接的に感情移入によって(einfühlungsmäßig)のみ経験され得る」(IV. 200)。この一歩先には、「内的知覚の明 例えば『イデーンⅡ』のなかに、次のようなくだりが見られる。「私の体験は私には直接に与えられるが、他者の体験は私

間達の共同体とその世界を前提し、このように予め了解され出来上がった世界のうちの一人の人間として理解された限りで の我に関わっているのである。このような意味での内的知覚・自己経験は決して直接的(無媒介的)に明証的な知覚ではな 然的に理解された内的知覚は、人間としての我に関わっており、それは暗黙のうちに、他の人間としての他者を前提し、 既に他者への関係をうちに含み、他者経験を暗黙のうちに前提し、他者によって媒介された自己経験なのである。

フッサールは、この自然的な意味での自己経験が他者に媒介された経験であることについてしばしば語り、こう述べてい

更に、「私は、他の人間の経験を直接に持っているようには、人間的人格としての私の無媒介的経験、直接的自己経験を持た て、そこから逆に次のことが言えるようになる。即ち、「他者が最初の人間であって、私ではない」(XIV. 418)、それ故、 は、「世界の内の人間」(I. 115)として、世界を前提する「世界概念」(XVII. 259)であり、私自身を一人の人間として捉え 「私が自己を人間として経験するのは、他者という迂回路を通じてである」(XIV.416)。彼によれば、「人間」というの 他者を人間として捉えるというそのことが私自身に振り返って移されることによってなのである(IV. 167)。従っ

ない」(XV.665)、と。ここにおいては、直接的に与えられる私の体験 (例えば、私の痛み)を越えて如何にして他者の体験

ではなく、

共同体経験 (Gemeinschaftserfahrung) である」(XVII. 243)。同じことを、

彼は『ヨーロッパ諸学の危機』のな

私のまったく私的な経験なの

その意味で『形式的論理学と超越論的論理学』のフッサールは言う。「世界経験は、

(他人の痛み)が間接的に経験され得るのか、などという問題は起こらない。

114)、と言う。それは、どう理解されるべきであろうか。彼の言う「原初的」とは何であろうか。 的態度においては、我と他者を相関的とするフッサールは、現象学的還元の遂行後には、他者との関係に先行する「原エゴ り、これについては一転して、他者経験はこのような原初的な自己経験に「基づけられて(fundiert)いる」、と言う。 てはならないものとして、他者経験を前提せず、他者によって媒介されていない「原初的(primordial)な自己経験」を語 言うこともできる。しかしフッサールは、このように他者への関係をうちに含み、 (Ur-ego)」(XV. 14) を語り、この意味においては、「私が超越論的 現象学的還元は、 現象学が上のような意味での「内的知覚」に関わるものではないことを言うためにこそ導入された、 (transzendental) 他者経験を前提する内的知覚と混同され には、最初のものである」(XV ح

#### 一 原初的世界経験

うな) 61f.)、即ち、 或る事物を経験することは、 験する時、 ちにであれ、 私は、 は、「その起源と意味からして他の主観とその……志向性を指示している」(I. 124, 127)。また、およそ世界のうちの 世界を「私の私的 それの持つ「精神的述語」(例えば、「誰かが書き、 他者への関係が含まれている、ということを意味している。例えば、私が眼の前の或る事物を「本」として経 万人にとって共通の一つの世界として経験している。それはとりもなおさず、我々の世界経験には、 (privat) な世界としてではなく、間主観的 (intersubjektiv) な世界として」(I. 34; vgl. III. 抽象的な個々の主観と個々の客観との「主観―客観」関係という実験室のような場で生じる訳 誰かが印刷し、誰かが売り買いし、 誰かが読む」といったよ

識する者としての他者に関わっている」(VI.468)。我々の世界経験が常に既に他者への関係を含み、暗黙のうちに他者経験 物である。……私が、たとえまったく一つの物に向かう時も、私は、少なくとも潜在的には常に、 を持っている。……およそ世界は、個別化された人間にとってのみ存在するのではなく、人間共同体にとって存在するので かでは、 次のように記している。「我々は世界知覚において孤立しているのではなく、そのうちで同時に他の人間との繋がり 端的に知覚的なものの共同化によってそうなのである」(VI.166)。或いは、「物は初めから、万人にとっての 共に表象する者、

から「異他な(fremd)もの」――「他者に負っているもの」(XV.528f.) ――を捨象して、「固有な(eigen)もの」の領野 経験を論じるにあたって、まず、まさに「問題になっているそのもの」(他者経験)を遮断し、 へと還元する(I. 124ff.)。こうして他者経験によって媒介されていない固有性領野(Eigenheitssphāre)を限界づけ(I. にもかかわらず、いや正確には、それ故にこそ、彼はエポケーを遂行する。周知のように、 他者を度外視し、我々の経験 フッサールは『省察』で他者

によって媒介されていることは、フッサールにとって自明のことであった。

ら引き離された単独者」(VI. 188)とかいった意味での「認識論的ロビンソン」をもたらすものではない。というのも、 ない。それ故、 りにしようとする。この固有性領野への還元は、現象学が或る意味で「独我論的」な「各自的 (je-eigen) 主観性からの出発」 134f.)、ここにおいて言わば「最初の他者の登場」(XIV.475) を、即ち、他者が如何にして根源的に経験されるかを浮き彫 (XVII.243)を持たざるを得ないことを表しているとはいえ、それは、自然的に理解される意味での独我論へ導くものでは 例えば「蔓延したペストが私一人を残す」 (1.125) とか、「船の難破のような偶発事によって人間の共同体か

サールは言う。 関係を含み、他の人間達の共同体と世界を前提しているからである。「こうした抽象はラディカルではない」(I. 125) とフッ としての自己の経験が他者によって媒介されていたように、こうした孤立した人間としての独我は、

彼の考えるもっとラディカルな「抽象」は、こうした言わば「複数で演じる独我論という滑稽劇」へ導くようなものでは(1)

igen) 主観性からの出発」の独我論へ導くものではの独我論へ導くものではない。というのも、人間ない。というのも、人間ない。というのも、人間

(I. 136) であり、これに「基づけられた段階」として他者経験に媒介された「構成的に二次的な、本来的な意味での客観的

て取り出される抽象的な「層」であることをフッサールは絶えず強調している。それは、彼が次のことをはっきり意識して、、、 験の「一つの本質的な構造」(I. 125) であり、世界の「一つの層」(I. 126) である。それが「方法的」な抽象によって初め なく、「原初的」な世界なるものが自立的なものとしてそれだけで与えられることはない、ということのみならず、また逆 いたことを表していよう。即ち、自然的な経験においては、「原初的」経験なるものが具体的な経験の段階としてある訳では ことのできないような「原エゴ」にとっての経験とその世界であり、それは「原初的(primordial)」と呼ばれるような、経 自然的な経験においては、容易にこの原初的経験が跳び越えられ、常に既に他者経験によって媒介されている、とい それがもたらすのは、 他者への関係をまったく含まず、他者と相関的な私ではないような、複数において考えられる

tion) 」(例えば、箱の見える側面の知覚)を越える「共現前(Appräsentation) 」(箱の見えない側面の共知覚)(I. 139)に なものとして経験しているその根拠への超越論的な問いとの連関においてであった (I.124) ということを。彼の他者経験へ である。即ち、彼が他者経験を問うのは、「客観的世界の超越論的な問題」(I. 121)、つまり、我々が世界を客観的・超越的 rung)」の働きをする「下層(Unterschicht)」(I. 127) である、と言う。ここで振り返って、次のことを確認しておくべき 成立している。しかし、それは、「構成の秩序において……それ自身で最初の、即ち、^原初的~な超越(或いは、~世界~)」 よって、或いは、与えられるものを越えて思念する「より多くの思念 (Mehrmeinung)」(I.84,151) によって超越の経験は 在的な世界なのでもない。そこにおいても既に、フッサールの言う「背景」や「地平」の経験によって、即ち、「現前(Präsenta-ある。原初的世界は、我に固有な領野とは言っても、それは世界の分割された一部であるのでもなければ(I. 134)、意識内 の関心は、専ら、このように超越として経験される世界の「構成(Konstitution)の秩序」において占める他者経験の役割に

フッサールは、原初的経験の世界がこのような「抽象」によって取り出されるものであるにもかかわらず、「基づけ(Fundie

三に、他者経験による間主観的世界の構成、という段階においてである。このように、他者経験は、より高いレベルでの超に、他者経験による間主観的世界の構成、という段階においてである。このように、他者経験は、より高いレベルでの超 な超越」(ebd.)が成立する。詳しく見れば、フッサールは超越の経験を三つの構成の段階において考えている。 内的時間意識における時間的客観(過ぎ去るもの)の構成(XI.204f.)、第二に、地平意識による原初的世界の構成、 第

越の経験を可能にするのである。

従って」(XV. 19, 107) であり、また、間主観的経験への「移行」(XIII. 370; XIV. 60) が語られるのは、「構成の秩序」に れは、「一方が他方を前提している」という意味において、「まず、一方が成立して、それから初めて、他方が成立する」と っている構造、他者経験の意味・本質を解明することである。では、それはどのような構造を持っているのだろうか。 おいてであって「時間的に経過する発生」 られてはならない (V. 125)。原初的経験が「最初のもの」と呼ばれるのは、「発生的・時間的ではなく、志向性の基づけに 125) もしくは「虚構的発生」(XIV. 477; vgl. VIII. 177) によって考えられるとしても、ここで「心理学的な発生」が考え いう言い方でも表現され得る。しかしそれは、このように「まず (erst)、……それから (dann)」という「発生の比喩」(V. (statisch) な分析」である (ebd.)、とフッサールは言う。それが目指しているのは、「構成の秩序」において他者経験が担 「前者なしに後者を持つことはできないが、その逆は成り立たない」(I. 127) という「一方的基づけ」の関係と考える。 この下層である原初的経験(とその世界)と、それに基づけられた間主観的経験(とその世界)との関係をフッサールは、 (I. 136) においてではない。それ故に、ここで問題になっているのは、「静態的

### 三 他者経験の構造

は言う。「私が他者を〝見て〟、彼を理解し、彼の表出を追う時、私は或る程度、彼のうちで生きる」(XIII. 337)のであっ 我々が他者に出会う時、 我々は他者を眼前に知覚し、 経験している。それはフッサールにとって自明のことであった。彼

比も起こっていないし、如何なる類推も、類比による移転も起こっていない」(XIII. 338; vgl. 289)。「自己の体験 て、そこでは、「私〔フッサール〕が繰り返し述べるように、本来、 tion)」(I. 144) と呼ぶのも、他方で、 ろう。他者はあくまで、 同じ直接性をもって経験されるとしたら、「他者の固有なものは私の固有なものの単なる契機となり、彼と私は同一となって を有するとしても、 的か間接的か」という二者択一は曖昧で、他者経験は、二元論的な類推や感情移入などしていないという意味では「直接性」 の他者経験論の中には、 覚している訳ではない」(1.146)し、「私が現に見ているものは、記号ではなく、単なるアナロゴンではなく、 ることと共に理解されねばならないだろう。それ故、フッサールは繰り返し述べている。「私は他者を単に私の複製として統 のとのみ解されてはなるまい。フッサールが、一方では、異他なものを固有なものの「志向的変様態(intentionale Modifika-ゴンではない」(I. 125) という言い方も、そうした他者経験の持つ緊張関係から来るものであって、 を遡示していると共に、 しまい」(I.139)、他者経験は自己経験と変わる所なく、他者を他者として経験するということの意味が失われてしまうであ (Spiegelung) であるが、本来的には反映ではない。他者は私自身のアナロゴンであるが、本来的な意味ではまた、アナロ 他者経験とは、 「直接知覚」説こそが自然的な他者経験を良く表している、というのが出発点であった。しかし彼によれば、この「直接「直接知覚」説こそが自然的な他者経験を良く表している、というのが出発点であった。(ユ゙) 彼にとって、《内と外》や《物と心》という二元論的前提に立って他者経験を「間接的」とするこれら両説ではな 他者の体験にとってアナロゴン(Analogon)として働く、これはナンセンスである」(XIII. 187f.)。フッサール 他我の経験のことと言えようが、他我(alter ego)は、「他の我」というその意味からして、一方では、 なお別の意味では「或る間接性」(VIII. 62; I. 139) を持たねばならない。もし、他者が自己とまったく なるほど伝統的な「類推」説や「感情移入」説の用語や要因が多々見出されるのは否定し得ないに 異他性 他方では、「我」に解消されない「他」性を持つのでなければならない。「他者は、 (Fremdheit)(その意味での間接性・超越性) 異他なものはあくまで固有なものを「超越する」(vgl. I. 125f., 145) と考えられてい 感情移入なるものは起こっていない。また、 において経験されるのでなければならない。 単に困惑を表明するも 私自身の反映 何らかの意味 如何なる類

方では我との或る異他性において、経験するという緊張関係を解明することを要求している。 で模像ではなく、他者である」(I.153)、と。他者経験の問題は、他者を、一方では我との或る類比性において、と同時に他 そこで先程の原初的世界に戻れば、そこには、諸々の物体 (Körper)のなかに一つの特異なものが見出される。 即ち、「私

挙げるのは、何よりまず、この (物体として捉えられるに先立ってキネステーゼ的に捉えられている)「私の身体」の知覚で である。原初的世界とは、この「方位づけの零点」・「絶対的ここ」としての「私の身体」を中心とする方位づけ(パースペ るなどということを言うのではない」(XIII. 267, vgl. XIV. 7, 57) とフッサールは言い、その意味において「私の身体」を あった。「自己の身体の知覚は、或る仕方で、他の身体の知覚の基礎である。これは、私が私の身体から他の身体へと推論す クティブ)において現出している世界に他ならない(I. 148)。他者経験を基づける「原初的自己経験」としてフッサールが がそのうちで直接に支配している唯一の客観」・キネステーゼ的に「機能する器官」(I.128) としての「私の身体 (Leib)」

であるためには、私が私の身体へと方位づけられた私の原初的世界のうちにありながら、他の身体へと方位づけられた、他 けにおける一つの物体として経験されるのか、ここにフッサールは他者経験の問題の核心を見ていた。他者経験が他者経験(生) とっての方位づけの中心たる私の身体が如何にして諸々の物体のあいだの一つの物体として、即ち、他者にとっての方位づ いるその方位づけ(異他なるパースペクティブ)の中心たる身体として経験されるのか、そしてそれと一体となって、私にいるその方位づけ(異他なるパースペクティブ)の中心たる身体として経験されるのか、そしてそれと一体となって、私に ぎないものが如何にして他者の身体として経験されるのか、即ち、私にとってとは異なる方位づけにおいて世界が現出して の原初的世界を或る仕方で経験するということでなければならない。 「原身体 (Urleib) 」と呼ぶ。他者経験を巡るフッサールの思索は早くから、他者の表現現象から体験 (心) への感情移入と

も、そこにいるかのように」或いは「もし、そこにいたら」(wie wenn ich dort wäre) (I. 146, 148) 持つであろうような そこでフッサールが繰り返し使うことになった表現が、次のようなものである。即ち、「いまここに」いる私が、「あたか 即ち、

事物経験において、「見える」側面の現前と「見えない」側面の共現前は一体になっており、「同時に現前且つ共

単なる想起や予期でもなければ、単なる想像でもなく(I. 157)、まさに一つの経験である。フッサールは言う。「それは、(E) tigung)」(=知覚)に対して「現前化(Vergegenwärtigung)」と呼ばれるような、或る種の「現前化」的経験ではあるが、 は、或る固有なレベルの超越の経験なのである。(XIV. 8f.; vgl. VIII. 495Fn.)。 それぞれ構成の段階が異なるとは言え、超越の経験が問題となる所にこそ成り立っていた (vgl. I. 145) のである。 は超越を時間的なもの・原初的空間的なもの・異他なものという三つの構成の段階において考えており、これらの類比は、 それは言うまでもなく、他者経験が自己経験や事物経験に還元されることを意味しているのではない。先に見たように、彼 である。フッサールは他者経験を、或る時は想起との類比において語り、また或る時は事物経験との類比において語るが、(ミロ) に動機づけられた「一つの新しい類型の現前化」(I. 145) であり、「経験の固有の一つの根本形式」(VIII. 63; vgl. XIV. 352) ゼ的能力性(Vermōglichkeit)(I. 146) と、私の身体と他者の身体の「対比(Paarung)」という受動的総合(I. 141f., 147) み共現前という性格を持ち得る」(I. 139)。要するにそれは、「私はそこに行くことができる」という私の身体のキネステー 随意の現前化ではあり得ない。それは現在化との絡み合いにおいてのみあり得、……それによって要求されるものとしての として他者を経験する、という。それは、「現前(Prāsentation)」に対して「共現前(Apprāsentation)」、「現在化(Gegenwār-原初的世界を「いまそこから」持っている「他のエゴ」、つまり、「そこという様態においていま共に現存するエゴ」(I. 148) 他者経験

ルは、 というのも、「その区別は既に、他者経験がその仕事を済ませたことを前提している」(1.150)からである。そこでフッサー て区別した上で、如何にして両者が総合されるのか、という仕方で他者経験の可能性を問う問い方をはっきり拒否している。 られてはならないということである。フッサールは、あらかじめ私の原初的世界と他者の原初的世界を《内在と超越》とし しかし、ここで注意しなければならないのは、この超越が、その対概念である内在から単純に切り離すという仕方で考え 他者経験における「共現前」を事物経験における「共現前」との類比において語ることによってこれに答えようとす

すれば、私はまず私の原初的世界のうちにあり、次いで他の原初的世界への踏み越えが越こる、という二段階的な経験の進 はなく、初めからその内に現前と共現前の分裂を含み、両者の協働から成り立っているように、他者経験の場合にも同様だ 現前する一つの知覚の機能共同性にある程に融け合っている」(ebd.)ように、つまり、およそ知覚が現前のみから成るので ない」(ebd.) のである。 行を語ることはできない。ここでは、「時間的に先行する自己経験に基づくような経験の時間的発生といったことが問題では いる彼の原初的世界とが、或る一つのものの分裂として協働しており、両者が同時成立的な関係にある、ということを。 と言うのである。それは、次のことを意味するであろう。他者の身体の経験において、私の原初的世界における物体として、、、、、

察』の中にも見出される「静態的」現象学と「発生的」現象学の対比 (I.110,163) を念頭において使われたものと解すべき さて、それ故にフッサールは、ここでの他者経験の分析を「静態的」と呼んだのであった。この表現はやはり、 同じ「省

であろう。では、それはどのような対比だったのだろうか。

### 四 他者経験の発生

である。それは、 記述的な性格を持つ「構造の研究、即ち、〝発展して出来上がった〟段階における主観性の具体的な類型の研究」(XIV. 481) なる。それによれば、「初めに形成される現象学は、単に静態的」であり、それは、「博物誌的な記述に類似した」(I. 110)(2) フッサールは一九二〇年代になって、この「静態的」現象学と「発生的」現象学の区別と関連について盛んに語るように 「構成する意識と構成される対象の相関を追う」(XIV. 38) ような「構成的記述」であり、そこでは、「説

明的な発生については問われない」(XI. 340)。しかし、この「すでに〝発展した〟主観性に関わる対象の〝静態的〟な構成

問う「動態的 に 確かにいくつかの点において発生的考察が利用されているが、全体の枠組みとしては、「静態的な分析」であると言う。 九年の講演に基づいて執筆された『省察』も、決して引けを取るものではない。ところが、 研究をもって開始された現象学が発生的研究によって深化されねばならないことを説いているが、この点において、 現象の志向的内容に入り込むことによって、 ″歴史゛へと導くことになるような志向的な指示を見出す」 (I. 112f.) のである。 おいて」考察される「内在的発生」(XI.117) である。それは、「心理学の心的物的な外的考察を使用することなしに、 この「歴史を追う」(XI. 345) のである。 論」(XI. 339) であり、「すべての統覚はノエシスとノエマに従った構造を持って」(ebd.) おり、 だけでなく、 フッサールは、こうして一九二〇年代の講義と著作の至る所で、二つの現象学的方法の区別と関連について述べ、 他者経験も一つの統覚 ッサールは一九二一年の草稿でも、 「°出来上がった〟統覚」(XI.345)として考察される。しかし他方で、「意識は、 アプリオリな発生的構成が、 すべての出来上がった統覚は、背後にその「〝歴史〟、即ち、時間的発生」(XVII. 316)を持つ。発生的現象学は、 その「歴史」について発生的に考察され得る筈であり、 (dynamisch) な発生的現象学」(IX. 286) が築かれる。 それを「手引き」(XIV.41) とする高次の段階の問いとして、この静態的な構造そのものの発生・歴史を — 「類比的統覚」 (I. 138) しかも必然的に先行する前者に積み重ねられて、 発生的現象学の課題として、「如何なる意味で、一つのモナドの発生が他のモナドの しかし、それは「心理学的発生」の問いとは異なり、あくまでも「現象学的還元に ――であり、そのノエシス的・ノエマ的構造において考察され得る 静態的な考察は、 およそ「意識の理論は、 対応」(XVII. 257) しており、 絶えざる生成 そのような発生的考察によって深化 肝心の他者経験論においては、 統覚 静態的考察においては、 (Werden) | (XI. 218) (Apperzeption) 九二 しか

者の受動性と結合している」(XI.343) ということを述べていた。このように彼は、『省察』以前に、 発生に嚙み込み、 発生の統一が多数のモナドを法則的に結合することができるのか」、或いは、 「私の受動性は、 他者経験の発生的考察

るものであり、また、モナド的我がそこから発生して来る「生ける流れる現在」——それ自身は、「我なき (ichlos) 流れ」・(※) 階における他者経験の前形態を「受動性、即ち、本能的な衝動の生」(XIV. 405)・「衝動志向性」(XV. 595) のうちに求め に収められた草稿のうちには、このような考察への若干の指示を見出すことができる。それは、「発展して出来上がった」段 を眼中に収めていたにもかかわらず、『省察』ではそれに立ち入ろうとはしていない(vgl. XV. 15)。『間主観性の現象学へ』

係を見出すものである。『省察』においても、「エゴはそれ自身にとって言わば \*歴史\* の統一において構成される」(I. 109) とになろう。先に〔前節末〕、私の原初的世界と他者の原初的世界の同時成立的関係を見ておいたが、「エゴと他のエゴは常 と述べられていたが、こうした発生的な考察においては、エゴそのものの発生が問われるのと不可分に他者経験の発生が問 先我的なもの それ故また、原初的経験に基づけられた間主観的経験という静態的な層的《構造》そのものの《発生》が問われるこ (Vor-Ich-liches)」(XV. 598)――そのもののうちに「他の生ける現在としての他者」(XV. xlix)への関

に必然的に根源的な対化(Paarung)において与えられ」(I. 142)、その際、「私の自己は……対化によってこの《私の》と いう性格を受け取る」(I.144) と『省察』で述べられていたことも、こうした発生的な考察において、「私の」原初的世界と 一彼の」原初的世界との「根源分割(Urscheidung)」(VI. 260)が同時発生的に成立することとして理解されよう。(※)

問題が現象学において「超越論的な問題」(I. 110) となり得るためには、静態的な《構造》の記述を経なければならず、そ れを経ることなく素朴に発生の問題を扱おうとするなら、容易に自然主義・心理学主義・生物学主義へと転落するであろう。 やはり、哲学的考察の秩序、つまり、誤った道に入り込まないために守るべき順序と考えねばなるまい。 同時に他方で、 静態的分析は至る所で発生の問題に突き当たり、発生的分析によって補足される必要が露呈して来

先行し、これに手引きを与える不可欠の段階であるということは、単に、フッサールの思索上の発展から来た順序の問題で

しかし、こうした発生的な分析によって、先の静態的分析が無用になると考えてはなるまい。静態的分析は発生的分析に

る。

『省察』の他者経験論は、「静態的分析」と断わりながら、

いくつかの発生的概念を持ち込んでいるが、それは、二つの

(I.137f.) へと考察を進めたのである。このような意味での他者を明らかにしないまま、

他者と間主観性の問題は生世界の内世界的 (mundan) な問題であって超越論的な問題ではないということになり、(紹)

フッサールによれば、

彼がこうして「超越論的他者」と呼ぶよう

人間的人格としての他者に向かう

はや上のような二つの問題の連関は見失われてしまおう。

ではなく、 きよう。 態的且つ発生的な」(I. 114, 170; XI. 220) 現象学であって、両者は、相互補完的にのみその本来的な機能を果たすことがで ということ、 方法を区別しようとしているにもかかわらず、 れだけで完結し得ず、必然的に発生的な問題への遡行を要求するということ、それによって補完されるのを必要としてい 他者経験の静態的分析は、発生的分析によって補完される必要があるとしても、それによって取って代わられる訳 それ故、 を表していよう。 静態的分析の静態的分析としての価値を認め、その上でその制約性を問題にし、 従って、 フッサールにとって問題なのは「静態的か発生的か」という二者択一ではなく、「静 自ら混同してしまっている、ということではなく、 寧ろ、 それを手掛かりにしな 静態的な方法がそ

がら発生的分析を導入するのでなければなるまい。

他者」(I. 122) を手引きにしながら、「(未だ世界的という意味を持たない) ……未だ人間という意味に至っていない他者」 のであり、 ているのである。 が の経験、 何に関与しているか、という問いにあったからである。ここで問題になるのは、既に出来上がった世界のなかでの他の人間 ものの分析にあったのではなく、 において他者の問題を捉えようとしている、と言うことができる。それ故にこそ彼は、 如何に関与しているのかということであり、その意味で、 「省察」の他者経験論は、 他人の心や表情・表現の経験なのではなく、我々の世界が客観的な世界として経験される場面そのものに他者経験 両者が或る密接な連関を持っていることは早くから指摘されて来たが、フッサールは、まさに、このような連関 伝統的な「他我認識」の問題が、その元を辿れば、所謂「外的世界の実在性」の問題と根を同じくするも 静態的分析に留まっていた。 専ら、 世界と世界経験の根拠への超越論的な問いに、 それは、ここでの彼の他者経験への関心が、 彼は他者経験の問題を世界が出来上がる手前のところに設定し 自然的に・内世界的に「経験される 異他性の経験としての他者経験が 具体的な他者経験その 如

越論的他者」という表題のもとで見据えていたものではなかっただろうか。 の他者》を明るみにもたらすことを可能にするであろう。そして、このような意味での他者の問題こそ、フッサールが(ミシ 験と世界経験において暗黙のうちに地平として機能しているような「非主題的」他者経験を、 他者経験を専ら「主題的」経験として扱い、言わば《対象としての他者》に関わっていたのに対し、発生的考察は、自己経 に語ることが許されるなら、このような発生的考察の意義は、何より次の点に存する、と筆者には思われる。 的な問題となる。ここでは、これ以上、他者経験の《超越論的な発生》の考察を追跡することはできない。しかし、予見的 までのすべての理論(シェーラーも含めて)が成果なしに留まった」(I. 173) 原因が存するのである。しかし、にもかかわ な他者の問題を抜きにして、単に他の人間を経験することとしての他者経験の記述や発生に向かおうとするところに、「これ 静態的考察は発生的考察によって補完される。超越論的な問いは、発生的な考察に向かい、発生的な問いは、 それ故、言わば《地平として 静態的分析は

#### おわりに

礁を縫って」《現象学的な起源 (Ursprung)》の探究を始めた所に形成されていった、と言える。そこでは初めから、(si) ル られて行った、と差し当たり言えよう。だが、両者の関係をめぐるフッサールの思索には、このような言い方では片づかな 間に中間的なものを求めるとか、何か折衷的なキマイラを求めるとかいうことではなく、両者の相互補完的関係として考え した《構造の問い》とすべてを流動化する《発生の問い》を二者択一的に立てることは拒否されていたが、それは何かその の言う《現象学的起源》とは何であったかを明らかにする作業は、また別の話となるであろう。 問題が残されているように、 振り返ってみれば、フッサールの現象学はその初めから、「論理学主義的な構造論と心理学主義的な発生論という二つの暗 いま筆者には思われる。 しかし、この二つの問いの関係を問い直しつつ、そもそもフッサー

- 1 例えば、次を参照。M. Scheler, Wesen und Formen der Sympathie, S. 232ff
- (2) I. 121f. vgl. XV. 3f.. 以下このように、Husserliana からの引用は、本文中に、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示 その他、下記の著作からの引用は、括孤内の略号を用い、頁数をアラビア数字で示す。Logische Untersuchungen (LU.).
- 3 XI. 19f., 70f, 339, etc. を参照! 「構造の問い」と「発生の問い」という言い方については、XIV. 475Fn. を、また、「構造」という語については、IX. 9. 89f.,
- 4 Vgl. XIV. Text Nr. 9 u. 10; IV. 243
- 5 Vgl. z.B. V. 38; XIV. 418; XVII. 260, 286, 290f.
- 6 Vgl. z.B. IV. 242; XIII. 432.
- 7 Vgl. I. 128; XV. 19
- 8 Vgl. XIII. 57f., 267; XIV. 7, 420; XV. 615, 634.
- 9 引用中の傍点は、筆者による。以下すべて同様
- $\widehat{10}$ M. Scheler, op. cit., S. 228f
- M. Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception, p. 412
- $\widehat{12}$ Vgl. z.B. XV. 507, 536 フッサール現象学においては、感性的知覚が志向的意識一般の「範型的な例」と見なされ、「構成の層」において、この知覚の
- 11
- 場面より「下」に《時間》意識が、その「上」に《他者》意識が考えられている、とヘルトは指摘している。K. Held(hrsg.), Edmund Husserl/Phänomenologie der Lebenswelt, Ausgewählte Texte II, Einleitung des Herausgebers, S. 12f
- 14 できない、驚くべき事実」「本能的事実」としての「感情移入」説に至ったT・リップス(Th. Lipps, "Das Wissen von fremden Vgl. IV. 375; VIII. 62; XIII. 188.「類推」説批判から出発して、「如何なる推論でもなく、或る根源的で、それ以上遡ることの

216, 256) は、 Ichen" in Psychologische Untersuchungen, S. 697, 713)、及び、「心的・物的に無差別な」新しい知覚概念によって、「類推」説 の二元論的枠組みそのものを根本的に変更しようとする「他我の(直接)知覚」説に至ったシェーラー(M. Scheler, op. cit., S. 共にフッサールが注目して取り組んだものであり、当面の我々の関心にとって重要であるが、ここでそれに立ち入

る暇はない。リップスについては、XIII. 21ff., 38ff. 70ff. usw. を、シェーラーについては、XIII. 73; XIV. 335 を参照 「想起は知覚の志向的変様態(Abwandlung)、過去意識は今意識の変様態、他者経験は自己経験の変様態」とする所に、

フッサ

- 元されるものとして、その超越的性格を無視してしまうとすれば、フッサールの意図からはずれることになろう。E. Fink, Nähe ind Distanz, S. 153f ·ル現象学の隠れた思弁的要素として「原様態(Urmodi)の優位」を指摘するフィンクの議論も、「変様態」を「原様態」に還
- VIII. 61; IX. 107; XIII. 57; XIV. 9, usw
- <u>17</u> Vgl. XIII. 62, 70; XIV. 336
- 索の一つの中心をなしており(XV. 648ff.)、『コペルニクス説の転倒』という副題によって知られている草稿において、「大地 化》と表裏一体を成しており、フッサールは他者経験としばしば同義的に使う「感情移入」という表現を、後者のみならず、前 経た自己経験〔第一節参照〕である。それ故、自己経験における〈私の身体の物体化〉は、他者経験における〈他の物体の身体 ことによって、他者の現実的経験に先立つ可能的経験(XIII. 253)として他者を先取りし、「他者という迂回路」(XIV. 62)を ば自己を自己の外に「押し出す」(XIII. 259f, 344)、その意味で「自己を疎外する(selbstentfremden)」(XIII. 441ff.; XV. 589) 者に対しても用いる(XIII. 441f.; XIV. 61f.)。《原身体の物体化》の問題は、晩年に至るまで、間主観性を巡るフッサールの思 おいては不完全さを免れず(vgl. XIII. 238)、その欠落を埋める為には、或る「迂回」(XIV. 62) を必要とする。それは、 (Erde)」の思想が「原身体」との類比において語られるのも、このような脈絡においてであることに注意されたい ("Grundlegen 私の身体を一つの物体として統握すること(それはまた、私を一人の人間として統握することに繋がる)は、 原初的な経験に
- 「想起ではない」ことについては、例えば、XIII. 56; XV. 560を参照。「単なる想像ではない」ことについては、アギィーレ が

de Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur", in Philosophical Essays in Memory

- 詳しく追跡している。A. Aguirre, *Die Phānomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik,* S
- 20 予期」と「他者経験」という「三つの現前化の等根源性」という洞察である。それは、他者経験を「経験の一つの固有の形式 として認めてしまうことを意味していよう。K. Held, "Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologi 察」の方が重要であり、それはまた実はフッサールのうちに潜んでいた洞察ではないか、と思われる。即ち、「想像」と「想起・ してフッサール内在的な批判」は明晰であるが、筆者には、この「挫折」の指摘よりも、ヘルトがそこから引き出す「単純な洞 『混交態』であることを指摘したヘルトは、両者が協働しないことにフッサール他者経験論の「挫折」を見ている。この「徹底 "wie wenn ich dort wäre"という表現が、 「想像」を表す「非現実の接続法」と、「想起・予期」を表す「可能の接続法
- 21 schen Transzendentalphilosophie" in Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung, S. 44 XIII. 56; XV. 96, 191, 447, 487ff., 591, 598. 『危機』書で語られる、「脱ー現前化(Ent-Gegenwärtigung)」(想起)と「自己疎
- 22 発生的現象学の成立にあたって「一九一八年におけるナトルプの著作の研究からの影響を最も重要」とするI・ケルン

外(Ent-Fremdung)」(他者経験)との「類比」(VI. 189)というのも、このような脈絡で理解されねばなるまい。

- 23 und Husserl, S.355) の解釈に対しては、様々な疑義が考えられるが、成立史的な問題にここで立ち入る余裕はない。 Vgl. auch XIV. 412Fn., 477
- 第一に、モナドの「静態的」研究から「発生的」研究への、第二に、「抽象的な独我」から「他の主観」への研究の進展を挙げて いるが、二つの進展方向は単に併記されているだけで、両者がどう絡み合うのかについては何も触れていない。この点、 フッサールは、一九二五年の講義『現象学的心理学』第四三節(IX. 216f.)では、これまでの考察を必然的に補うものとして、
- 1, S. 96) が、それが果たしてそのような「指示」となり得るか否かは、本稿以下に述べる論点から慎重に吟味されねばならない blem der Teleologie und der Leiblichkeit in der Phänomenologie und Marxismus" in Phänomenologie und Marxismus Bd ることのなかった、間主観性の問いへの答えが見出せるような方向へのいくつかの指示」を読み取る(L. Landgrebe, "Das Pro-の著作でも同様で、「他の主観」と「間主観性」の問題の「発生的」考察を明白に論じている箇所は、多くない。 ランドグレーベは、この「共同化の本能的志向性」としての「原衝動」のうちに、「批判者達をもフッサール自身をも満足させ

ように、筆者には思われる。

- 26 Vgl. XV. 587, 589f., 640; K. Held, Lebendige Gegenwart, S. 164ff
- 27 こうして、第一節の初めに見た、自己経験と他者経験の相関性が、発生的現象学の観点から意味を与えられる。
- $\widehat{28}$ Vgl. z.B. L. Feuerbach, Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie, §. 41.

これは、A・シュッツの立場である。A. Schutz, Collected Papers, vol. 1, p. 164f

 $\widehat{30}$ Vgl. XV. 16, 114, 210, 365 usw 29

- 31 Intersubjektivität·····", S. 47, 50)° Vgl. XV. 497. ヘルトが『省察』の他者経験論の「修正の唯一の可能性」と考えたのも、この方向であった("Das Problem der
- 32 J. Derrida, L'écriture et la différence, p. 230
- Vgl. LU. I 164, 244.

批判と御教示を賜った方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。また、本稿は、DAADの奨学金によって可能となった、一九 日、国学院大学)において口頭発表された草稿に加筆訂正をしてなったものである。両学会の席上及びその他様々な機会に有益な御 八四年十月から一九八六年九月までのケルン大学及びブッパタール大学における研究の成果の一部であり、併せて関係者の方々に感

本稿は、第三七回西日本哲学会(一九八六年十一月二十日、西南学院大学)、及び、第九回日本現象学会(一九八七年五月二十五

(西南学院大学非常勤講師・昭和五十九年本学大学院博士課程修了・哲学)